

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究（三十五）——

津 守 真

花開く幼児期

幼児期という、人生の本質を凝縮したような数年間を生きた後、子ども自身、一つの生の頂点に達して開花したような、あるいは、一つの世界を手の中にいれたような、体感の水準での自覚に達しているように思われるのが五歳児の三学期である。この時期の、友だち同士の、またその中にひとりの生活を含んだ、幅広い、いつまでも続く幼児の遊びに直接ふれると、外観内面共に充実した旺盛なエネルギーを感得することができるが、活動は瞬時に移り去り、わずかにいくつかの形ある足跡が残されるにすぎない。

い。次に掲げるのは、五歳児三学期に達した女兒の残した足跡のいくつかである。

1月25日

写真1と2は、三学期に描かれたAの描画の代表的なものと云ってよいと思う。いずれも色鉛筆で美しい色を使って描かれている。写真では、髪を飾った女の子が小鳥を手の中に持っている。女の子は、普通は子どもの手の届かない、空を飛ぶ小鳥を手にはしている。こういう絵を描くときの子どもの心の中には、その描画

に対応するような世界があるのだと思う。これまで何か憧れをも
って望み見ていたものを、いまや手にいれた満足感と得意さを見
てとることが出来る。写真も内容の点で同様の描画である。髪を
飾った女の子が、果物を盛った籠を手をしている。果物は木の实
であり、それを手の中に持つことができた子どもの充実した世界
とその得意さがあらわれているように思う。幼稚園の三学期は、
この絵にみるように、幼児期の結実の時と云ってよいであろう。

この二つのえには、同時に、下の方に小さく描かれた単純な動
物を見逃すことはできない。写真1では、色もぬられず、飾りも
つけていない兎であり、写真2では、腹部の欠如した小犬であ
る。何色も色を使い、飾りをたっぷりつけた立派な女の子に比し

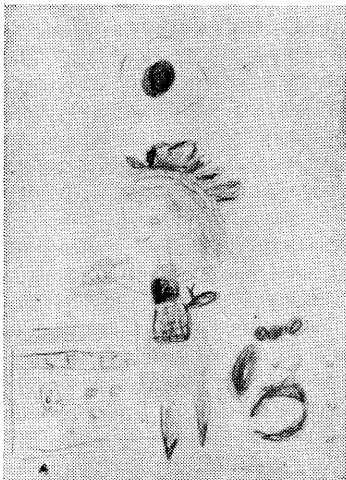


▲写真1

て、この単純な動物には色もなく、飾りもなく、単純な姿そのま
まである。自制心をもって、調和を作り出している女の子の姿が
立派であるほど、その中にいつも保たれている原始的なままの動
物に近い自分自身の姿を描き加えないではいられなかったのであ
ろうと私は思う。その段階での自己制御の限界をこえようと、赤ん
坊のように泣きわめき、混乱した心的状態に陥ることは、いつの
時期にも変ることはない。

2月11日

写真3の描画は、中心に赤い花を描いた同心円のテーマであ

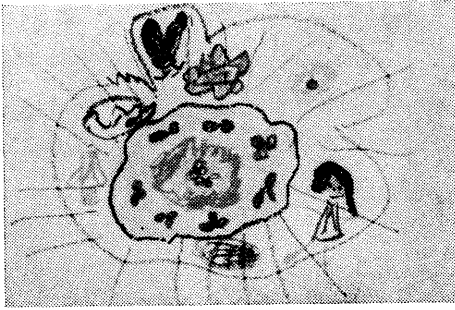


▲写真2

る。赤、ピンク、橙色、黒など、同心円に美しい色を使っており、放射状に描かれた線は緑色である。その同心円の中に、家、鳥、花、人など、子どもにとって親しいものが配置されている。

Aの心の世界には中心ができ、いろいろな事物がその中に位置づけられ、全体が中心に統合された精神の状態にあると見てよいと思う。Aの描画を年齢順に並べて整理してみると、中心をもった渦巻のモチーフの描画のシリーズが、四回の時期にあらわれている。第一回は、一歳十一月の時であり、第二回は四歳十ヵ月の時であって、この連載の第十四回に記してある。今回は第三回目

▼写真3



である。(第四回目は、八歳〇ヵ月の時である) いずれの時期も、中心をもった渦巻のモチーフという点は共通であるが、描画の様式は、それぞれの時期の能力によって異っているのは当然である。幼稚園期の最後の時期に、この渦巻のモチーフの描画が出現しているのは、重要なことであると思う。

2月14日

食事のとき、小学生の子どもが、「わるいことしたら、バカっていうんだよ」という。私は「そうかな」と考えた。するとAは、「そういうときは、はなしをきけばいいのよ」という。私は思わず感心してしまった。

誰かが悪いことをしたとき、直ちにこちら側のものさしで評価して馬鹿というのではなく、相手の話をよくきくということ、おとなにとってもむづかしいことである。五歳児が、自分本位の見方をおさえて、相手に即して行動しようとしているのを見ると、幼児なりに完結した姿を見るような気がする。もっと小さいとき、常識的と思えるほどの相手の気持が分らないで、相手の物をもぎとったりとびかかっていったりしていたのが、そうした子

どもなりの体験をふまえて、いまやそれを乗り越えている。もちろん、この後、社会生活がもっとひろがってくると、新たな問題が生じて、この同じことを何度も学び直さなければならぬのであるが、この時期にすでに、このようにはつきりした認識があることに感心してしまう。

2月17日

明日は幼稚園から羽田空港に遠足にゆくという日、熱を出してしまった。Aは「きょうは、一日、床の中でしりとりをしてるんだ」と云って、じっとして寝てすごす。幼稚園で、他の子どもから、「Aちゃんは、あんまり、はりきりすぎたんだ」と云われたとのことである。

Aは、幼稚園で、この頃とてもよく遊ぶ。皆から、張り切りすぎだといわれるくらいよく遊ぶ。いつもだと、熱を出しても床の中で静かにしていないのに、この日は、翌日遠足にいかれるように、自制して寝て過す。

この間に、写真1・3に類似した描画が何枚もあるが省略する。前に示した「ももいろのきりん」のはなしも、この間のこと

である。

3月15日

夜ねるとき、妹のYに手紙を書いて、枕もとにおいておく。Yへのがみ

「Yちゃん　ねえねよ　おきましたね　またねえねとあそびましょうね　ねえねのそつえんしきに　きてくださいね　ねえねわこんど　しょうがっこうにはいります　もう　うめのおはなさいてはるですね　でわ　おげんきでね　さようなら」

朝、目を覚ました妹は、枕もとにてがみがおいてあるのを見て、よんでもらい、満足げにそれを抱きかかえて歩いている。いつも妹と一緒に面白く遊んでいる体験は、それが通り過ぎた後にも心の中に留まっけていて、ひとりになった時にも、温かい気持ちの交流は続いている。そして妹に対する語りかけのことばになり、いまやそれは文字になる。

「もううめのおはなさいてはるですね」と、庭に咲いている梅の花が、意識の面によび醒まされる。妹に対する呼びかけの背後には、自然の運行を認識の中に入れるだけのゆとりのある世界が

ある。梅の花は、冬の終りを告げ、新らしい季節の到来の前触れであって、発達の転換期にあることがこの子どもにおぼろげに認識されているのだと思う。

3月16日

夕食後、台所で母親にきいている。

A 「しょうがつこうって どういうところ？」

母 「そうねー」

A 「すっぱいみたいなどころ？ おもしろいこともあるし つまらないこともあるんでしょ」

小学校の入学を間近にして、未来に対して複雑な気持ちがある。いままでの体験からみても、未来には未知の脅威があったし、また同時に、意外にそれを越えて、新たな楽しみの発見もあった。大きな環境の変化の境界に立って、未知の未来を望み見るとき、幼児の体感の水準での感想は、甘味と辛味を混ぜ合わせたものである。それは、「すっぱいみたいなどころ」と表現される。おとなにも納得のいく表現である。

3月21日

写真4 鉛筆がきの小さな絵である。「おめでとう ことしもなかよくしまししょう」と字がかいてあり、楽譜のマークが記してある。歌うような楽しさが感じられる。生活全体が楽しさに溢れているのだろう。

◀写真4



3月27日

朝食の食卓で、いろいろの話に興じているとき、Aはふとい

う。

A 「あたしってね いつも はじめはうまくできないけど、どりよくしているうちに、できるようになるのよ。なわとびだってはじめはできなかったでしょ。」

これも、ずっと小さいときからこれまでの体験を、子どもなりに考えをめぐらして得た哲学と云えるだろう。「あたしってね」と、まず自分自身の体験について述べる。「いつも」というのは、くり返し同様の体験をしていることを示す。「はじめはうまくできないけど」というのは、時間経過における最初の状態の認識である。Aは、実際、小さいときからいつも、新しいことに出会うとき、最初は、どうしてよいか分らなくて、混沌の状態から始まることが多かった。そういうとき、周囲のおとなも戸迷い、ただ何か支えになれるようにと願いつつ共にそこにいるよりほかなかつた。そうしているうちに、子どもは自分で、自分の道を見出してゆく。それが、「どりよくしているうちに」ということばで表現されている。おとなの目からみれば何でもないようなことであつても、子ども自身にとっては大きな努力であることがしばしばあるであろう。また、混沌の時間の経過の中に、意志の生ずる瞬間があるのであつて、それも子ども自身にとっては、意識的な努力として認識されるであろう。「どりよくしているうちに」できるよう

になる」というのは、こうした生きる人間の体験としての時間の過程の認識の表現と見てよいと思う。「なわとびだってはじめはできなかったでしょ」と云うときのなわとびは、この子どもにとつての最近の一例である。いろいろのことについて、同様の体験と認識があつたであろう。将来出会うであろう別のことについても、同じことがあてはまるであろう。もちろん、具体的なことはそれぞれの場合によって違うから、最初はうまくできず、混沌からはじまることは同じであろうが、結局は、「どりよくしているうちに」できるようになる」という自信を、子どもは獲得している。すなわち生の時間の認識の獲得でもある。幼児期に体験される、こうした人生に対する基本的な態度は、一生の間に、異つた水準で、反復して体験し直されてゆくのであろう。幼稚園期の最終の時期に、子どもが堂々として自信をもって歩いているように見えるというのは、人間としての基本的体験をこの水準でなし終えたことからくるものではないかと私は思う。いうまでもないことであるが、このような基本的体験は、具体的な能力の水準とは関係がない。いかに個々の能力は高くとも、基本的体験において未成熟な場合も多いし、能力は低くとも、堂々としている幼児はたくさんいる。現代においてはとくに、幼稚園や家庭の環境の故に、幼児としての成熟を妨げられていることが多いのであると私

は思う。

保育の成果または到達点について

ここに、幼稚園期の最後の時期に、Aが到達した成果を、描画とことばを手がかりにして示したのであるが、どの子どもも同じ成果に達するのではない。ここに示したのは、ひとりの子どもの特例である。しかしながら、幼児期を十分に生きた子どもであるならば、形や質は違っても、内容的に充実している点では、類似の成果を残してくれているはずである。その点から云えば、これは孤立した特例ではなく、具体的なあらわれ方は異にしても、ひとつの典型として見ることができると思う。

保育の成果の考え方にもいろいろある。

第一には五歳児の終りまでに到達する個々の能力をもって成果と考える考え方があつた。またそのような到達能力を目標にしてカリキュラムを構成する考え方もあつた。それは論理的には分り易いけれども、生きた人間の子どもの保育について考えると、私は何かおかしいと思う。このシリーズではこの考え方をとっていないことは云うまでもないであらう。個々の能力は生活全体の

一断片である。それが生み出されるものになっている生活の全体そのものに目をとめなければならぬ。

第二には、誘導保育などが示すような、保育活動の目に見える成果の考え方もあつた。五歳児の三学期になれば、動物園、お店や、郵便や、学芸会など、——それもいま、私は人為的に段どりされた単元保育を云っているのではなく、個々の子どもの遊びを育てることからつみ上げられた、組織立った大きなごっこ遊びのことを云っているのだが、——参観の人が見ても感心するような、外から見える成果をあげることもある。いろいろの条件がととのつて、こうした大きな活動の成果を見ることができるときは幸運な場合である。先生も子どもも張り切って、大きな活動を盛り上げることができたら、嬉しいことである。しかし、いつもそれが可能とは限らないだろう。そのときに、こうした成果を見ようとする、保育者の目はそのことのみ向けられて、個々の子どもの生活や心の状態が見えなくなってしまう。そうなると、おとなの存在は子どもにとって外圧となつてはたらく、子ども自身の成長を妨げてしまう。

そこで第三の考え方は、子ども個人の内的成熟をもって成果と考える考え方である。そう考えると、それぞれの子どもが、その能力や状況に応じて、十分に生活できるようにする保育が重要と

なる。保育としては、ごく自然な、あたりまえの保育である。そのことは、どの時期にも共通なことであって、その保育の積み重ねの上に、五歳児の最終の時期がある。すなわち、一步一步あゆんで来て到達した成果はたしかにあるが、成果そのものが問題なのではなく、内的成熟を生み出すような保育の過程が重要である。

遊ぶことがみつかるまで、子どもと共に模索し、労し、冷い雨の中を遊び場をさがして歩きまわり、満足して遊べるように空間を備え、あるときは、他の子どもと共存することができるようになる。神の極度の緊張の中に時を過し、またあるときは、共に楽しんで時間を忘れ、保育者の仕事には限りがない。その中でさまざまに展開してゆく子どもと世界と織りなされて、保育の過程は進行する。私はこのシリーズの中で、その過程を記してきたが、こうして五歳児の三学期ころになると、それぞれの子どもなりに、幼児期は開花する。(Aについては、このシリーズ6、7、14、25、31のなどにも記してある。)

ただし、五歳とか六歳とか年齢をかぎって考えることには問題がある。五―六―七歳という幅をもった時期のあるところに、幼児期の成熟期があり、同時に次の時期が準備されていると云った方がよいであろう。幼稚園の卒園までという時点を区切ってものを考えると無理が生ずるであろう。

五歳児の三学期、それは、子どもが最も充実して遊び、また生活できる時期、静かに落ちついて遊べる時期、そして幼児期全体の収穫の時である。
(つづく)

*

*

*